

西日本豪雨により甚大な浸水被害が出た倉敷市真備町地区では、犠牲者の約9割を高齢者が占めた。なぜ避難できなかったのか。命を守るための鍵は何か。兵庫県立大の木村玲欧准教授(43)が防災心理学に聞いた。(大橋洋平)

高齢者に被害が集中した理由は三つあると考えられる。一つは身体的な問題。足腰が不自由だと避難が困難で、犠牲者には要介護者が多かったようだ。身体的なハンディから周りに迷惑を掛けたくないと考え、避難がおっくうになった可能性もある。

二つ目は情報活用の問題。現在はインターネットでもテレビのテータ放送でもリアルタイムに災害情報を入手できるが、高齢者には情報にアクセスできない人が少なくない。仮に受け取れても、警報や避難に関する情報は多様化しており、適切に理解できないまま災害に巻き込まれてしまふ。

三つ目は地域力の問題だ。

# 自助、共助、公助高めて

同居や夫婦のみで暮らす高齢者に、地域を挙げての安否確認や避難誘導がどこまでできたのか。避難情報を流すだけでなく、対面で避難を呼び掛ければより効果的だ。声掛けで多くの住民が救われた一方、地域のセーフティネットから漏れ

た人がいたのかもしれない。三つの問題は災害後にも関係する。高齢者は身体的な問題から災害関連死のリスクが他の年代より高く、情報に疎いと行政支援がタ

意と支援が欠かせない。災害時は、たとえ迫っていてもまだ大丈夫という「楽観主義バイアス」が強く働く。高齢者ほどその傾向が強い可能性がある。しかし災害は100年に1度でも起きたら命も財産も奪

らうした行動をひとまとめにした警報発令時のルールを自分で決めてほしい。「共助」では地域力の底上げが不可欠。自治会や自主防

災組織などで計画を立て、安否確認や避難誘導などの体制を築くべきだ。例えば上の階に垂直避難をするにも支援が必要な高齢者がいることを理解し、事前にその実数を把握しておく。支援が必要な人の名簿を作り更新しながら、それを基に訓練していく必要がある。

## 高齢者の避難を考える 西日本豪雨から

兵庫県立大 木村 玲欧准教授

識者インタビュー



きむら・れお 名古屋大助教などを経て、2011年から現職。岡山県が西日本豪雨での初動対応などを検証するため設置した「災害検証委員会」メンバー。京都大学院情報科学研究科博士後期課程修了。東京都出身。

「自助」の面では、まず警報に関する意識を改めるべきだ。大雨警報が発表された時点で非日常になったと頭を切り替える。徒競走の「よいい、どん」と同じで、警報が出た段階で「よい」と身構える。テレビをつけたら、懐中電灯や防災袋を玄関に置いたり。そして避難情報などを「ごん」の合図にして避難する。こ

力を高めていく責務がある。大流行が起きた。その後は減っていたが、今年7月以降、首都圏を中心に感染

が拡大。既に14年以降で最も患者が多い年になってい

## 風疹患者 昨年の5倍超

496人 首都圏中心に拡大

国立感染症研究所は19日はない人が他の世代よりも

風疹はくしゃみやせきで感染し、主な症状は発熱や発疹。潜伏期間は2〜3週間。感染力が強い。妊娠初期の女性が感染すると、赤ちゃんが難聴や心臓病、

ただ、妊婦はワクチンを接種できない。感染研は「妊婦や赤ちゃんを守るため、成人男性もワクチンを接種して」と呼び掛けている。2013年には国内で感

## かき船移転中止

和活動をする市民らの団体が、河川を管理する国が運



小西裁判長は、「料亭は祈い場」にふさわしくた

第5011回ナンバーズ数字選択式全国自治宝くじ(19日・東京宝くじドリーム館) <ナンバーズ3> 046 ストレート 102,100円 65口 ボックス 17,000円 438口

第76回ビンゴ5抽せん結果 数字選択式全国自治宝くじ(19日・東京宝くじドリーム館) 抽せん数字 02・06・13・18・25・30・31・38 1等賞 3,466,500円 5口 2等賞 209,800円 70口 3等賞 27,600円 239口

【詐欺に注意】